詩歌によむ修学院離宮の構成と野山

修学院八景詩歌, 十境詩の解説を通して

A STUDY ON THE COMPOSITION OF THE SHUGAKUIN IMPERIAL VILLA
THROUGH THE ANALYSIS OF THE POETRY COMPOSED ON THE PLACE

田中 明*

Akira TANAKA

The purpose of this paper is to clarify the composition of the Shugakuin Imperial Villa. This paper will analyze the poetry of the villa. The composition will be considered by two ways. One way is to look through the meaning of the places the emperor appeared on and its relations. And another way is to deal with the construction of its composition. The paper considers the positional relations of the views composed in poetry and the places of the villa. Furthermore, the paper clarifies the places on the field as the villa.

Keywords: *the Shugakuin Imperial Villa, Retired Emperor Gomizuno-o, Imperial Outing, Poetry, Composition, Place*
修学院離宮、後水尾院、御幸、詩歌、構成、場所

1. 序

詩歌に詠まれた修学院離宮について、場所構成の解明が本稿の目的である。詩歌の分析を方法とする。本稿は前稿^{註1)}にひきつづき経験の諸事象について考察する。前稿では遊興の行程から諸亭の配置構成を検証したが、本稿では離宮の場所構成について意味と構造の両面より分析を行う。離宮の構成について、特に史学の分野において既往研究は重要な成果をあげた^{註2)}。修学院離宮には様々な改変が加えられたから、造営当初における事物的構成の解明、またその変容過程の追跡は重要な主題であった。本稿はそうした既往研究に多くを拠っている。

一方で詩歌分析に拠る建築的場所の究明が行われている^{註3)}。それら諸研究は建築物の背後に隠れゆく制作の実相を、あるいは事物として建築された構成の意味を明らかにする。しかし特に修学院離宮に関して、詩歌は主に史料として扱われ、造営年代の特定や、往時の遊興の検証などに用いられた^{註4)}。本稿は離宮を詠んだ詩歌の読解を通して、修学院離宮における生きられた構成の実相を見定めようとする。

2. 野山の風景

2-1 修学院八景

万治2年(1659)4月、後水尾院の側近が修学院に招かれ、現在でいう下離宮を中心とした造営の披露がされた^{註5)}。相国寺住持鳳林承章も招かれた一人であった。その時点では修学院離宮の造営が続いて

おり、現在の上離宮周辺は未だ完成していなかったとされる^{註6)}。

それから間もない同年5月、後水尾院は鳳林を仙洞御所に呼び寄せた^{註7)}。鳳林はそこで新たな修学院八景詩歌の編纂を命じられる^{註8)}。鳳林は後水尾院と協同して各詩歌の題と担当者を定め、直ちにその手配を開始した。題は8題で和歌と漢詩を各1編ずつ、計16編の詩歌であり、和歌は公家の歌人らに、漢詩は五山の長老らにそれぞれ依頼した。後水尾院は添削などを通じて積極的な関与をし、色紙に清書された詩歌は同年12月に完成する。

当八景詩歌は以下の通りである^{註9)}。

村路晴嵐

夕あらしふきのこしてや山もとの雲よりさきに帰る里人

中務卿智忠親王

翠嵐吹^{註10)} 霽景清鮮 檐外酒帘茅店連

村叟醉帰^{註11)} 帯^{註12)}西照^{註13)} 三叉草深雨餘天

前相国鹿苑鳳林承章

修学院晩鐘

この寺は瀧の流れにひゞきそふ入相の声もよそにかはりて

妙法院宮堯然親王

修学招提境轉^{註14)} 幽 暮鐘殷々萬機休

宸遊誰識^{註15)} 発^{註16)}清興^{註17)} 數杵声申月半鉤

南禅金地竺隱崇五

* 京都大学大学院工学研究科建築学専攻
博士後期課程・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Graduate School
of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.

遠岫帰樵

眺むるに暮るゝもおしくはるゝと柴おひつれて帰る山人

聖護院宮道晃親王

遠岫雲興連^二翠微^一 看来樵者送^二斜暉^一

檐頭別是重多少 猶帶^二佳山風景^一帰

建仁大統九岩中達

松崎夕照

かげうすく残るゆふ日の松がさき秋をおひたる風の色かな

前大納言飛鳥井雅章

松崎勝地玉楼前 佳景看来日已遷

斯境欲^レ知^二奇絶處^一 好風只在^二夕陽邊^一

天龍妙智補仲等修

茅檐秋月

山水の世々すみぬべき心をもかやが軒ばの月はしる覧

権大納言烏丸資慶

月照^二茅檐^一興特悠 愛看涼色坐間浮

山堂不^レ隔九天影 浪説洞庭湖上秋

南禪語心規伯玄方

平田落雁

山さとは秋ぞ身にしむはるゝといな葉色つき雁おつる頃

前中納言岩倉具起

洛邑長天秋水通 平田千頃一群鴈

有^レ声詩景数行字 修得形^二歌典学功^一

相国勝定雪岑梵峯

隣雲夜雨

こよひきく雲の隣の夜の雨にたれ名にしおふ江をもしのばん

権中納言中院通茂

高閣依^レ山景不^レ同 ト^レ隣暮雨白雲中

感^レ時却恨風流事 春夜打^レ花秋夜楓

天龍鹿王賢溪玄倫

叡峰暮雪

しぐれつるくもは夕べの峯越えて雪にさやけきひえの山風

神祇伯白川雅喬

艮嶽由来護^二九重^一 近濃遠淡為^レ君容

晚風吹^レ雪千層頂 始信詞人擬^二士峰^一

建仁清住茂源紹柏

2-2 修学院八景と瀟湘八景

八景詩歌の題は古典瀟湘八景^{註10)}に準じており、幾つかの工夫によって山際の当地にあてはめられている^{註11)}。たとえば「遠岫帰樵」について瀟湘八景では「遠浦帰帆」であるが、水のない当地では「浦」が「岫」として山間の意となる。帰航する「帆」は帰宅する「樵」となった。同様に瀟湘八景における水辺の景「平沙落雁」「江天暮雪」なども「平田落雁」「叡峰暮雪」とし、「瀟湘夜雨」「洞庭秋月」といった古典本来の河川、湖沼の固有名は「隣雲夜雨」「茅檐秋月」とされた。

また修学院八景詩歌が瀟湘八景に準じているのは題名の変更だけでない。「村路晴嵐」詩における「酒帘」の要素は瀟湘八景において「山市」を表すものとして典型であり^{註12)}、本八景「叡峰暮雪」において「雪」を山頂の積雪に表すことも「江天暮雪」にて多く見られるものとされる^{註13)}。他にも本八景「隣雲夜雨」歌における「名にしおふ江」とは「瀟湘夜雨」の瀟水、湘江であろうから、歌中「しのばん」との

意思表示には、それら古典風景への志向が読みとれる。虎林中虔は「隣雲夜雨」について「盧山艸菴之寂寞を憶える」^{註14)}と評し、当詩歌が修学院を介しつつ、中国古典風景を想起させたことを示す。また「村路晴嵐」の「山もとの雲」、「遠岫帰樵」の「帰る山人」、「茅檐秋月」の「澄む水」など本八景歌の多くが冷泉為相による瀟湘八景歌^{註15)}を踏まえており、本歌なしでの受容がありにくいものとなる。同様に「遠岫帰樵」の風景描写が仁恕の「遠浦帰帆」詩と「同じ発想」にあることなども既に指摘されるところである^{註16)}。

このように修学院八景詩歌が実景以上に古典に多くを拠っている事実について、その詩作にいたる制作背景が考えられる。すなわち作者のうち鳳林、堯然法親王、道晃法親王らは後水尾院に同伴し、作詩以前に現地を訪れているが^{註17)}、他の作者に関しては訪れたかが不明である。竺隱崇五などは当時江戸に居たが故に、制作依頼もその返信もすべてが書簡で行われている^{註18)}。それら制作背景は消極的に解されることがある。修学院八景詩歌が実景を伴わない理想的な描写にとどまっている^{註19)}とされる所以であり、本八景詩歌が実景を基にできず、古典に準拠せざるを得なかったとも考えられる。

しかしながら既に離宮に遊び、実景を得た鳳林ら三者の詩歌はどうか。すなわち「村路晴嵐」詩、「修学晚鐘」歌、「遠岫帰樵」歌などの一連が所謂実景の描写であるかは疑わしい。詩中に登場する「村叟」「山人」などは御幸時の状況を現実的に省みれば、一行が目当たりにしたものとは考えにくい^{註20)}。むしろそれらは題目において想起された人物を詩中で演じていると解すべきである^{註21)}。特に「修学晚鐘」歌にて鳴り響く寺の鐘は、文意から円照寺のものでもあろうから既になく^{註22)}、明らかに想像されたものであり、詩的な創作がなされている。修学院を経験した作者でさえも上記であるから、他の作者に関しては初めから実体験が問われていなかったであろう。本八景詩歌は他の日本化された八景詩歌と同様に、事物的な意味での実景を本来目的としておらず、あくまでも物語の展開こそ詩中に意図されたと考える。

こうした修学院八景詩歌における古典への準拠を積極的な意図として捉えるには、さらに詩歌によって開かれた風景の、すなわち内容の考察が必要となる。たとえば「村路晴嵐」詩は玉潤「山市晴嵐」詩の風景^{註23)}から多く借りている。しかしその意味するところが「天子の「雨露之恩」」を表現していると解釈されるから^{註24)}、ここでは上皇が主題におかれている。また伝玉潤「遠寺晚鐘」詩^{註25)}の寺が霧煙の山間における視覚的不在であったのに対し、本「修学晚鐘」歌では当地の歴史的文脈として対象の不在である。故に描かれた風景とは決して抽象的なものでなく、古典八景に基づきながらも修学院の場所に即した具体性を伴って読むことができる。

八景詩歌に関して、後水尾院の先帝である後陽成院は近江八景の最終的な成立に間接的なながらも関与したとされ、後水尾院の本八景詩歌作成も少なからずその事実刺激されたものといわれる^{註26)}。このように八景詩歌作成自体が同じ上皇としての立場を、さらにいえば父子の関係を多分に意識させたものであれば、詩歌のあり様もまた上皇という立場に対する意味合いをもつ。「茅檐秋月」詩における「山堂隔てず九天の影」が全方位において月を望めると詠いつつ、「九天」とは九重でもあるから、同時に天子の場所を望める意をも有する。修学院八景について「この作品は「宸遊 誰か識る 清興の発することを」（修学晚鐘）「近濃 遠淡 君が為に容づくりす」（叡峰暮雪）といった院を直接示す表現を見るまでもなく、修学院という場、後水尾院と

いうその場の主を強く意識」したものと指摘される²⁷⁾。すなわちこれらの論考を踏まえるならば、修学院八景詩歌とは周辺の野山を上皇の地と前提し、その御幸において上皇自らを開示する風景の諸相を詠み集めたものと解す。

2-3 野山の風景と離宮の不在

しかし本修学院八景詩歌における離宮の不在はどうか。本詩歌において建築物としての離宮は殆ど詠込まれていない。僅かに「隣雲夜雨」の「隣雲」が詩中「高閣」と言われるところに、事物としての隣雲亭が暗示されるのみである。たとえば「茅檐秋月」における「茅檐」が離宮建築の一部であるか量りようがなく、むしろ景に「洞庭湖」を感じたように場所は自在であり、離宮の一部と限るべきではない。「修学晩鐘」の「修学」とは離宮ではなく寺院であったし、表題に固有名を伴うものも「松崎」「叡峰」であり、離宮とは他所なる場所である。またその他は場所を特定しない野山の一般名詞を掲げている。

この不在に関して、当八景詩歌成立時に離宮が未だ完全には建設されていなかったことを理由にする場合がある。特に鳳林の日記『隔蓐記』において上離宮の浴竜池と思しき記述がみとめられるのは早くても寛文1年(1661)8月のことであり²⁸⁾、詩歌成立時である万治2年の記述には当池が著されていないことから離宮の完成はそれ以降である²⁹⁾。八景詩歌において離宮の描写が見られないのは離宮の実体こそ当時不在であり、本詩歌に基づいて理想的な離宮が建設されたとする見解さえある³⁰⁾。すなわち修学院八景詩歌における離宮の不在を、その事物の不在とする考え方である。

しかし当の八景詩歌は各作者によって色紙に清書され、仙洞御所に保管されていたが、万治4年(1661)の大火によって焼失した³¹⁾。だが現在に伝わる詩歌が焼失以前の複写であるかといえそうではない。後の寛文4年(1664)に後水尾院は各作者に対して、詩歌色紙の再提出を命じているからである³²⁾。幾つかの障害³³⁾を経て同年11月にはそれら色紙が後水尾院の手元に再び集められた。注目すべきことは再提出された寛文4年の時点では修学院離宮は既に完成していることである。失われた色紙を再制作したことからも文字としての複写は焼失期にも当然存在した。実際虎林中虔が八景詩歌の文面を目にしており³⁴⁾、複写の存在は考えられる。しかしながら後水尾院があくまでも原物として色紙の再提出にこだわったのは、離宮造営以後においても詩歌の役割が終えられていなかったことを意味する。同時に本八景詩歌がそもそも文字情報としての役割のみを担っておらず、むしろ色紙に直筆された原物として遺すことこそ重要であったならば、修学院の地に後水尾院の存在を名実共に標づけたことがその結果である。修学院一帯の野山において院による詩的風景が見出されつづけることこそ目的であったとも言い換えられよう³⁵⁾。すなわち本詩歌における実体としての離宮の不在も、単に事物の不在といった消極的不在ではなく、後水尾院に意図された積極的不在であったと考える。

その限りで「修学院の山荘は詩的な出来事がおこることが期待されている舞台であった」³⁶⁾とする見解は正しい。山荘、すなわち修学院離宮を演者、物語の両者のもとに隠れつつ支えゆく「舞台」として捉えることこそ重要であり、あくまでも主題は遊興を通じた院自身による野山の風景である。修学院は上皇の御幸を風景獲得の契機とする遊興の場所と言える。

3. 離宮の構成

3-1 下離宮

次に修学院離宮における個別の諸場所を明らかにし、その連関として離宮の構造を見る。またその構造とともに前章で明らかにされた風景の意味について再度考察をする。

離宮を詠んだ幾つかの詩歌³⁷⁾のうち、虎林中虔による「修学院十境」詩は修学院離宮を十の名所として詠みあげている³⁸⁾。十境詩の題はそれぞれ「寿月観」「蔵六庵」「彎曲閣」「浴竜池」「万松塙」「隣雲亭」「洗詩台」「窮遼亭」「止々斎」「菩提樹」であり、そのいずれもが離宮内の諸物を題に定めている。各々の名称は詩作を命じたとされる後水尾院によって名づけられたものであり³⁹⁾、虎林による実際の場所経験とともに詩作の要となる⁴⁰⁾。本章では個別の諸場所を検証するから、当十境詩は考察に際してもっとも適当であると考えらる。

周知のように離宮での遊興は、寿月観への興入れより開始された。また前稿で、寿月観が到着と同時に再出発の場所であり、かつ帰着の場所でありながら還幸に際する場所であったことが示された⁴¹⁾。それは遊興の二重構造を支える亭であったから、ここでもやはり寿月観から見てゆくことこそ順当であろう。

寿月観

姮娥献藥寿⁴²⁾無窮⁴³⁾ 両八千秋誓⁴⁴⁾始終⁴⁵⁾
海内望⁴⁶⁾光輝⁴⁷⁾聖德⁴⁸⁾ 人間亦有広寒宮⁴⁹⁾

寿月観は下離宮中央部に位置し、庭園を南東にまわす。現存する建築物は近世末期に建造されたが、旧規に拠り再建された⁴²⁾。附属室である蔵六庵を除いて大方の平面は踏襲されている⁴³⁾。寿月観は昼の使用も多く、そのベンガラ色の壁面はタウトによって紅葉を反映させたものと評されたが⁴⁴⁾、やはり夜間の使用について諸日記中に特記される場合が多い。修学院には三人の上皇が御幸したが、各上皇共通して夕食、観月の歌会、酒宴などの事例がみとめられる⁴⁵⁾。寿月観は後水尾院宸筆の扁額を一間南側の軒下に掲げる。それは離宮における唯一の飛び石の軸上に配されているから、外部からの接近に従っている。一間のトコから庭園の名所である滝口を結ぶ軸は南を向いており、この軸上に見る田畑、一乗寺山、果ては山の端の月にこそ寿月観構成の主題があると考えらる。拙訳を記す。

月の精霊姮娥⁴⁶⁾は仙薬を天子に献じて永久を祝い、良臣⁴⁷⁾は千歳もの間、天子に付き従うことを約束する。民は暗夜に輝く月光を見上げるが故にその聖徳に帰すであろう。天子の宮殿寿月観を省みれば、人界にもまた月世界の宮殿、広寒宮⁴⁸⁾があったことを知る。

寿月観の「観」とは「観る」という動作的意味での「観」であるが、「うてな」「たかどの」といった建築物の一形態として、事物的意味をもつ。「月を寿ぐ観」と訓じれば後者が意に沿っている。また「月」とは「姮娥」「広寒宮」など詩中の故事に照らすまでもなく天体としての「月」である。しかし「月」とは同時に「無窮」「千秋」などの語が開く時間的広がりとしての「年月」、文意に則せば天子の来歴としての「月日」の意を詩中にもたす。すなわち「寿月観」とは、月下においてそれを眺めやる場所をいうとともに、天子の徳を月光と見なしつつ、その生きられた来歴を祝い省みる場所の両義と解される。その時は「人間に亦有り広寒宮」といわれるように、人界でありながらも人界には有りにくい「聖徳」の場所として月と一体し、天下の民

にその光明をほどこすことを知る。本十境詩第一に掲げられた「寿月観」とは、そのような空間的かつ時間的「月」のあり様を示すと同時に、天子による聖徳の場所として超越的な離宮のあり様を表明する。ここで示された「月」を有する場所は下離宮中他所にもある。

彎曲閣

十歩閣兮五歩楼 彎々曲々映清流^一
這中無限好風景 捲^二上珠簾^三月半鉤

彎曲閣とは寿月観の南、下離宮南東の隅に位置した亭の名称である。既に靈元院享保期の御幸中には失われており^{註49)}、現存しない。当亭に施されたとされる枯山水らしき跡が現在遺るのみである^{註50)}。

十歩で閣があり、さらに五歩ゆけば楼亭へいたり着く。この庭をいく度も曲がりくねる小川には清らかな水が映えている。楼亭からは筆舌につくしがたい風景を窓越しに望むことができるのだ。ふと珠簾より目をあげれば、かの月のやはり弓なりに曲がるのを見る。

彎曲閣は当初「二階之御亭」もしくは「隣月亭」^{註51)}などと呼ばれたものであるから、月を眺める高殿であったといわれる。その配置は、水流と枯山水とを介して寿月観に対面し、「十歩の閣、五歩の楼」と言われるように、杜牧の「阿房宮賦」^{註52)}の一節に因みその距離の近さ、寿月観との親近な関わりが読みとれる。寿月観から彎曲閣へといたる一連の動作によって、両者の連続した関係が示される。両亭に挟まれた間隙、すなわち寿月観に南面する広がりとは当時から「庭」と呼ばれており^{註53)}、たとえば上離宮について当時そこを「庭」と称した記録がないことから、この下離宮一帯があるまとまりをもった全体性を有していたことがうかがえる。

また詩中においてその「庭」は清流として描かれる。庭内をゆく清流は「彎々曲々」と蛇行し、弓なりに曲折するその具合が、視線を移した先の三日月の曲線に結ばれる。共に「彎曲」という語に由来するからである。ここで「庭」の景はやはり一連の動作によって「月」の景へと間断なくつづき、地上の「庭」は上方の「月」へ通じゆく。さらにこの「庭」とは他ならぬ寿月観との「庭」であったから、彎曲閣と寿月観とをまとめる全体性とは、かの「月」によって構造化されている。「下御茶屋、なかでも寿月観といまはない彎曲閣が構成する地域は、月を見る地域、いや月の世界と一体化する場所だった」^{註54)}との見解はこの場合当を得る。「月」の「庭」という天子の実存に触れる場所において、寿月観と彎曲閣によって構成される空間が下離宮として現れる。

3-2 「上離宮」

十境詩中、現在でいうところの上離宮に相当するものは「浴竜池」「万松塙」「隣雲亭」「洗詩台」「窮遠亭」「止々斎」の6つである。下離宮の考察につづいて、上離宮に相当する一帯を考察する。「現在でいうところの」と語を限ったのは、離宮造営当初そこは「上離宮」とは呼ばれていなかったからである。「上離宮」もしくは「上御茶屋」などといった呼称が、「下離宮」「下御茶屋」に即対応するものとして言われたのは、近世末期の光格院御幸時以降である^{註55)}。「上離宮」は当初囲いがなかったとされ^{註56)}、その開放的な構成が上下の二項対立を成立させなかった要因とも考えられる。先に述べたように当時「上離宮」において「庭」と称された例が見あたらない事実と表裏をなす。

しかしながら当時「上離宮」を名指しする呼称がなかったわけではない。たとえば「上の御池」^{註57)}といわれ、「池」すなわち浴竜池によって象徴された場所であった。ここでの「上」とは現在のように図式的な上下ではない。あくまでも寿月観に身を置いての「上」であり、上方という意味であるから、空間的な表象として解される。

そのように「上離宮」の場所は浴竜池によって象徴されていた。特に後水尾院において浴竜池での舟遊は御幸の主題であったから、浴竜池を除いた上離宮考察は考えにくい。「池」がこの場合における「上離宮」であり、それに代表された諸場所へとあらためて赴き、再度遊びなおすことこそ御幸の主たる目的であったことは前稿で明らかにした^{註58)}。すなわち本節では、前節において示した「下離宮」の場所とは別なる場所である「上離宮」を浴竜池に即して考察しようと試みる。

浴竜池

龍池洗^一盡碧潺湲 月照^二画船^三廻似^四環
水不^五在^六深太虚也 宸遊幾度鑑^七天顔^八

天子の御池は盃をすすぎ、その静かな池上にさらさらと水音だけを響かせる。月明かりは画船を照らし、水上をただよう様子は円弧を描く。水は作為なく、ただ太虚である。天子は遊ばされるが、月に照らされた顔を鏡のごとき水面にいく度も映しだされる。

起句では湖上の様子が示される。「洗盡」といわれるように蘇東坡「前赤壁賦」^{註59)}の情景が連想される。風もなく波もたたぬ湖上に明月を詠み、親しく歓談するその情景である。往時の遊興がそれに重なる。池上は静謐であり、ただ盃をすすぐ清らかな音のみが耳に聞こえる。承句になると月が現れるが、それは事物を照らす月である。月光は遊興の画船を明らかにし、円環を描く船の軌跡も穏やかに示される。ここでの月はまだ視覚的なもので、遊興の様子を浮かび上がらせる。

そして転句において詩は突如として池水の実相をいう。すなわち「水は深くに在らず太虚也」といわれる。「太虚」とは事物としては大空の意であるから、池はすなわち上方の空になる。浴竜池が「その浅さゆえに鏡のようになり、空と山とを映し、池を舟行すると空中に浮んだような幻想にとらわれる」^{註60)}と指摘されるところであろう。映された空に「天への同化」を制作意図とする論考も少なくない^{註61)}。

しかし一方で「太虚」とは「それ自身は常におのずから変転して一定の相を持たず、かつそこから全てが生じてくるもの」^{註62)}をいう。すなわち結句でいわれるところの「天顔を鑑みる」池がである。天子の顔は月光に照らされ、その相貌を池面に映し込む。しかし「月」の性質は下離宮で確認したところとは異なっている。下離宮において「月」こそ天子であり、その光とは天子の徳であった。「月」によって池は下離宮と通じるが、それは望まれ、待たれる「月」では既ない。むしろ天子を照らす光明であるから、天子自身が天子を明らかにする。浴竜池はそれを映し込み、ありありと天子の全貌を露にする鏡である。「宸遊幾度か天顔を鑑みる」とは、天子の実存に触れるその仕方を意味するが、「宸遊」すなわち上皇の遊興こそがその契機となる。浴竜池、すなわちそれに代表されるところの「上離宮」とはまさに遊興を目的とした場所には違いない。しかしそれは太虚であると同時に空であるから、「上離宮」自体は何の意味をも担わない。前章でいうところの不在がそこにみとめられる。そこは「上離宮」が太虚でありつつ空であるが故に、天子が天子自身の徳によって天子たることを再現前

させる場所としてある。

十境詩中上離宮に所在する他の詩歌を参照すれば⁶³⁾、やはり天子の場所であることが繰り返し詠まれている。「隣雲亭」とは「彩鳳」が飛ぶ「天開図画」の「皇園」であり、隣接する「洗詩台」と同じく人界を超え出た所在にある。「窮遼亭」や「止々斎」に著された幽邃なる描写もそれらに準じ、世俗を脱した境地として位置づけられる⁶⁴⁾。浴竜池に浮ぶ「万松塙」のその詩中、起句「松塙鬱乎として鶴鳴を聞く」はそうした幽境を引き受けるが、承句「上は霄漢を干し四時榮ゆ」から転句「千株の蔭好く天下涼し」にかけて、景の描写は徐々に天子の意味を帯びてくる。結句の「万壑の風は伝う万歳の声」は天子の治世を寿ぐものと解されるから、風景そのことが天子の意味を帯びている。下離宮における「月」の詩と同様の構造をもった詩文であろう。

前章を踏まえれば遊興の真意は不在の離宮、すなわち「上離宮」に集約される。それ自体は風景に隠れ「舞台」として支えるものであった。下離宮その他において上皇を省みる象徴的事物は風景において未だ有であったが、「上離宮」浴竜池においてはもはや不在である。池水は事物でありながら何ものをも象徴せず、太虚であった。「上離宮」は浴竜池に代表されつつ、月や八景詩歌などに示された上皇の実存を映し出す。離宮は上皇の顕現である各風景を浴竜池に集め、その池面において上皇自身を再現前させる構造をもつ。それはまた翻って「上離宮」が天子の顕現として野山の各風景を開いたとも解される。

4. 野山における離宮

4-1 両離宮の構造

前章までで修学院離宮が如何に御幸の場所であったか、その意味が確認された。しかしながら最終的にその構成が明らかにされるためには、それを支える外なる場所を示しつつ、それら内と外の両者が如何に構造づけられているかが考察されなければならない。本章では野山なる場所を手がかりとして、その離宮との関係をみる。

宮内庁書陵部に『上御茶屋地曳御規式場所絵図』及び『下御茶屋地曳御規式場所絵図』⁶⁵⁾という史料がある。それは建設に際して地曳祭を行った記録であり、文政期の光格院御幸を臨む同7年(1822)に離宮を整備した記録の一部である。近世において地曳祭は地鎮祭と分離して執り行われていたが、そもそもは一体の祭儀であるから、近世においても両者は密接な関係のもとに執り行われたとされる⁶⁶⁾。本来地曳祭は建設地中央に祭壇を設けて四神を祀る⁶⁷⁾。草刈初と地曳きを行うことで造営成就を祈願するものであるが、この史料では上離宮、下離宮それぞれにて祭儀を別個に執り行っている。それを鑑みるならば、上離宮、下離宮とは別個の建築物である。それらはまた別個の方位を有する敷地に属したものであるから、上離宮と下離宮とは互に異なる全体を有する二者であったことになる。

勿論、当史料は近世末期のものであるから、既に後水尾院御幸時には相当の年代が下がっている。離宮において獲得される全体性も異なったものであろう。しかしながら後水尾院当時の諸日記にも「上のお池へ行」⁶⁸⁾であるとか「寿月観へ還御」⁶⁹⁾などと言われるように、それぞれの場所における外出、帰還として認識されていた事実が確認される⁷⁰⁾。そこにはやはり異なる二者の場所を往来した意識があったと考える。本章で先ず確認されなければならないことは、上下離宮分離の仕方である。本節では先ずその中間領域、すなわち上下離宮に挟まれた外なる場所の現れに着目する。

しかしながら上下離宮の間とは、往来に際する中間領域であるが故に行為の途上であり、本来目的にはなりえない。故に諸日記等において特記されることが少ないと予想されるが、やはり限られた史料の中ではそうした中間領域を記述したものはきわめて少なかった。すなわちその場所が志向性の欠如として無名であり、有意味の場所相互に挟まれることで潜在したものと考えられる。しかし僅かにでも著されたものをみれば『无上法院殿御日記』の一節⁷¹⁾が挙げられる。

まず寿月観御庭の土筆とりそれより上池へゆく、田のあぜつたひの道すがら土筆などとりながら止々斎にゆきお池を見わたす

ここで著者である常子内親王は寿月観から止々斎へと向かう途中、当場所を通過している。そこは現在のように整備された園路ではなく、田の畦に行く。日記においてその場所が記述され経験されたのは、そこで土筆を摘んだことが契機となっている。ただしその行為は「道すがら」に行われたものであることから、目的はあくまでも「上池へゆく」ことにある。また「田のあぜつたひ」で行くように、そこは上離宮へ向かう通路としても本来無目的のものであるから、通路の機能以前に寿月観から上離宮へ行く目的が先行している。その意味で下離宮と上離宮とは既に離れて在り、この場合では池が下離宮の上に在るという構造が示されている。

同様に当場所に遊んだ事例⁷²⁾を見る。

未刻ばかりに隣雲軒へならせられ候 数多さざげ物などはこび持ゆく道すがら菜花すみれんげなど咲たるを見て

春ふかくなりにはけらしなひばりなく野辺はすずなの花盛なり
むらさきの花さし野辺のつばすみれこころひかれて道ぞまどへる
春の野の花のむしろと見えつるはれんげの草の盛なりけり
春ふかみ緑の野への末遠み霞める空に雲雀なくなり
子を思ふ道にやまよふ春の日の霞がくれにきぎす鳴なり

この場合でも下離宮から上離宮隣雲亭へ赴く途上が記される。ここでも「道すがら」であり、本来の目的は「さざげ物などはこびゆく」と他所にある。先の事例が土筆によって滞留させたように、やはり「菜花すみれんげなど咲きたるを見て」とその滞留の契機が明らかである。この著者はそうした野花によって動機づけられ、5首の歌にそこの風景を展開させる。

歌に従えば、その場所は「野辺(野べ)」とのみ言われる。その「野辺」は第2歌で「さし延べ」と掛けられて、「こころひかれて道ぞまどへる」と、心の赴くままに従えば、すなわち最初の目的を失するならば、どこまでも無限定な広がりとして与えられている。それは「春の野の花のむしろ」と見まがうようにレンゲソウの紅紫に一面が覆われる。その広がりはやがて野辺の視界を超えて「末遠み」、空にまでも及ぶが、「霞める空」は視界を明らかにしない意味でもやはり限りをもって現れない。「霞める空」に飛びゆく雲雀を見ることもするが、「霞がくれ」にただ雉子の声のみを聞きもする。

以上から上下離宮に挟まれた場所とは、「道すがら」として途上の場所であり、本来無限定で無際限な「野」であった。そこは御幸の目的においてのみ関係づけられ、意味を予め有す場所ではない。しかしながらひとたび目的を失すれば道さえ迷う魅力を産出するものであ

る。「道ぞまどへる」の「道」とは上下離宮を統べる構成の要ではあるが、あくまでも上下離宮の位置が「道」に先行すると考える。

4-2 野山を構成する離宮

先稿^{註73)}において御幸の山とは都を故郷として省みる山でもあった。またその風景を背後にて支える無限の領野も山において明らかにした。一方、前節にて修学院離宮周囲は「野」といわれ、やはりそれも無限定の広がりを垣間見せた。すなわち山も野も共に風景以前としての可能性を有した領野であり^{註74)}、意味産出の母胎といえる。

第2章では修学院八景詩歌の分析から、その野山の風景が後水尾院自身を顕したものであり、その契機が御幸であったことを確認した。しかしなおそれは場所の意味にとどまっており、未だその構成が明らかにされたとはいえない。本節ではやはり修学院八景詩歌に拠り、場所構成について論考する。

八景詩歌は8題に8所の風景を詠んでいた。繰り返しになるがその詠題はそれぞれ「村路晴嵐」「修学晩鐘」「遠岫帰樵」「松崎夕照」「茅檐秋月」「平田落雁」「隣雲夜雨」「叡峰暮雪」である。そのうち「村路」「遠岫」「茅檐」「平田」は一般名詞であり、その他「修学」「松崎」「隣雲」「叡峰」が固有名である。固有名に関して「修学」を修学寺とするか円照寺とするかでは異なるから特定しにくいとしても、それを除く3者は現在でも同様の名称であることから所在は確認できる。

国立公文書館蔵の『修学御幸記』^{註75)}では修学院八景詩歌に図版が添えられており(図1)、各題がそれぞれ方位を与えられて円環状に配されている。そこでは本来東北東に位置する「叡峰(叡峰)」が真東に示されているが、全体の方位を20度程度回転させれば「松崎」の位置も概ね一致する。「修学」の方位は真南に位置しており、やはりそれは南都八島に移転した円照寺^{註76)}と図版作者が解したものと考えられる。修学寺であれば赤山禅院の西方に位置したと伝承されているからである^{註77)}。都の東北に位置する修学院は山際に傾斜地でもあるため、「平田」などは一乗寺方面にしかないから、ここでの方位はありうるであろう。「茅檐」が詩において「山堂不隔九天影」といわれ、宮中を眺め得たものであるならば、やはり南西の御所への方位^{註78)}は妥当する。また「村路」が詩中「三叉」を詠むから、大原路と比叡路(雲母坂)の三叉路(現在の修学院離宮口)を指したものと考えられる。

いずれにせよこの図版で注目すべき点は八景詩歌の風景を円環状に配したことである。無論これもひとつの解釈にすぎないが、詩歌の内容に即せばこの円環構造は成立する。図版左側、北北西から東にかけての空白には赤山禅院があり、赤山がある。それらはどちらも夥しい数の出御^{註79)}がされた地でもある。

この図版において、いうまでもなく円環の中心に位置するのは修学院離宮としての場所である。しかしながら修学院離宮は上下の離宮によって構成されている。大きく見れば「山莊」としてひとつの場所ではあるが、より個別に見れば複数の諸場所の集合である。少なくともこの図版において「隣雲」は風景の一として南東に方位づけられている。この図版がどの程度厳密に方位を定めたかは知れないが、隣雲亭を南東に配するものは浴竜池において他はない。上離宮の場所は浴竜池によって代表されていたが、この図版の解釈もまた修学院離宮そのものを代表するものとして浴竜池が位置づけられている。

修学院離宮は無限の野山において四周を構造化し、その方位は各々の御幸の風景に開かれている。八景詩歌とは御幸に際して省みられる

上皇実存の風景であった。すなわち修学院離宮とは、その構造のただ中において成立する御幸の場所であったと結論する。

図1 修学御幸記(国立公文書館蔵)図版

結

以上修学院にまつわる詩歌を通じて離宮の構成を見た。その構成の意味とは御幸において上皇の実存を省みるためのものであった。野山の風景も上皇自身の諸相であったが、その場合離宮は潜在することによって風景産出の契機となり、御幸の場所を支えていた。特に浴竜池は離宮の中心であったが、それ自体は太虚でありつつ風景を投影し、上皇自身に拠って上皇を現前させる。その意味においても離宮とはあくまでも上皇の場所である。離宮の構成は無限の野山において上下に分節し、さらにはやはり浴竜池を中心として上皇の風景を四周に構造づけつつ開いていた。

註

註1) 拙稿、修学院離宮における御幸様式の変遷と場所構成について、日本建築学会計画系論文集、第621号、2007、11

註2) 森嶺、修学院離宮、創元社、1955、重森三玲他、日本庭園史体系 第18巻・江戸初期の庭(五)、思想社、1974、外山栄策、修学院離宮の庭園に就て(一)、国華、第563号、第47編、第10冊、1937、10をはじめとする一連の研究など。

註3) 建築論の分野における西垣安比古の研究は明恵上人の歌に基づいてその修行の場所を考察する。そこでは「すまう」ことの本質を多義性的もに示し、一箇所の場所を超えて「すまい」それ自体の様相を明らかにする。西垣安比古、高山寺における明恵上人修行の場所、建築の場所論の研究、中央公論美術出版、1998、pp. 141-160。また香西克彦による「窓」に関する一連の研究は、理論的研究とともに詩歌分析をその柱としている。それは考察の対象を建築の一部に限定したものではあるが、その成果は建築全体の有り様および、「風土の自己了解」の顕現として住居そのものについて再考し、再定義を行う。香西克彦、「まど」という現象—「まど」に関する風景論的考察I、日本建築学会計画系論文集、第567号、pp. 153-158、2003、5 他。一方山中冬彦による韓国集落の研究では亭の八景詩を構造的に分析することで、集落の全体構造について考察する。それは一集落の個別性にとどまらず、典型的成果として一般性を有する論考である。山中冬彦、景からみた集落景観と亭—韓国安東素山里三亀亭とその八景、日本建

築学会計画系論文集, 第 586 号, pp. 193-200, 2004. 12。

註4) 中島卯三郎, 修学院御山荘の御造営年代について, 造園雑誌, 日本造園学会, 第 12 号, pp. 18-20, 1949. 04. 森蘊, 修学院離宮の復元的研究, 奈良国立文化財研究所学報第二冊, 奈良国立文化財研究所, 養徳社, 1954. 同, 修学院離宮完成の段階的考察, 建築史研究, 建築史研究会編輯, 1954. 3, pp. 1-10. など。しかしながら森、外山前掲 2) などでは詩歌解説によって後水尾院の制作態度及び制作意図についても言及する。

註5) 鳳林承章, 隔簑記, 万治 2 年 4 月 1 4 日の条。

註6) 熊倉功夫, 後水尾院, 朝日新聞社, 1982 では万治 3 年 3 月以降とする。

註7) 前掲 5) , 万治 2 年 5 月 8 日の条。

註8) 八景詩歌作成の経緯については、岩間香, 修学院八景, 寛永文化のネットワーク, 思文閣, 1998, pp. 135-142 に詳しい。

註9) 本稿での修学院八景詩歌は外山栄策, 修学院離宮の庭園に就て (三), 国華, 第 565 号, 第 47 編, 第 12 冊, 1937. 12 に拠る。

註10) 瀟湘八景は「平沙落雁」「遠浦帰帆」「山市晴嵐」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「遠 (煙) 寺晚鐘」「漁村夕照」。北宋 (960-1127) の宋迪による画を沈括 (1031-1095) が随筆『夢溪筆談』に著したのがはじめてされる。堀川貴司, 瀟湘八景詩について, 中世文学, 第 34 号, 中世文学会, 1988. 5, pp. 101-110. 神田喜一郎, 中国の山水画と瀟湘八景図, 古美術, 三彩社, 1963. 6, pp. 33-36 など。

註11) 岩間前掲 8) , p. 140

註12) 渡辺明義編, 瀟湘八景図, 日本の美術, No.124, 至文堂, 1976. 9, p. 93

註13) 渡辺前掲 12) , p. 98

註14) 虎林中虔, 修学院離宮十題, 国立公文書館蔵。しかしながらここでの中虔は解釈に「廬山」を見ていることから、「瀟湘夜雨」よりむしろ李白七絶「望廬山瀑布」詩を想起したと思われる。そこでは夜雨の音を上離宮雄滝と解したものと考えるが、やはり同様に古典風景への収斂が興味深い。

註15) 冷泉為相による八景歌を記す。 瀟湘夜雨「舟よする波に声なき夜の雨を苦よりくゝる雫にぞしる」。 洞庭秋月「秋にすむ水すさまじくさ夜更て月をひたせるおきつ白浪」。 遠寺晚鐘「暮かかるきりよりつつふかねの音に遠方人は道いそぐ也」。 遠浦帰帆「風むかふ雲のうき浪たつとみて釣せぬさきにかへる舟人」。 山市晴嵐「松たかき里より上の峯はれてあらしにしづむ山本の雲」。 漁村夕照「波の色は入日の底に猶みえて磯ぎはくらき木がくれの宿」。 江天暮雪「あしの葉にかかれる雪も深き江の汀の色はゆふべともなし」。 平沙落雁「まづあさるあしへの友にさそはれて空行雁も又くだるなり」。百人一首始風早公前卿書集, 国立公文書館蔵底本。

註16) 堀川貴司, 瀟湘八景 詩歌と絵画に見る日本化の様相, 臨川書店, 2002

註17) 前掲 5) 万治 2 年 4 月 1 4 日の条。

註18) 前掲 5) 万治 2 年 6 月 2 3 日の条、同年 9 月 1 日、同月 4 日の条。

註19) 前掲 8) , p. 140、前掲 16) , pp. 96-100 など。

註20) 「旧院のみの御幸の折は所司代も供奉せしめず、辻かためなどいふこともなく、すべての行粧もなかりしなり」靈元院, 靈元法皇御幸宸記, 国立公文書館蔵, 享保 1 1 年 4 月 2 6 日の条、に言われるように後水尾院の修学院御幸は簡素なものであったとされるが、後水尾院の御製「分けみれば草木もさらにこやめて野山が末の道もさはらず」「奥が進む両側の群衆は、その数が多いにもかかわらず実に静かである」と解釈されるように後水尾院においても御幸は少なくとも管理されているから、そのような「村叟」「山人」と出会う機会は限られたものと考えられる。西和夫, 近世の数寄空間 一洛中の屋敷、洛外の茶屋, 中央公論美術出版, 1988。

註21) これらの「村叟」「山人」が想像された人物であるならば、逆的に「其の場に居合わせずそれでその場に居ないものとして指定される」ものと考えられる。すなわち実景であるか、将来的に出会うことを期待するかなどといった議論を本来的に必要としなくなり、あくまでも物語として、そのうちに限り風景を展開するものと考えられる。サルトル, 平井啓之訳, 想像力の問題 一想像力の現象学的心理学, 人文書院, 1955, pp. 25-30、参照。

註22) それが修学寺であれば既に廃寺となっており、歌中「よそにかはりて」

が成立しなくなる。むしろそれを文智女王円照寺として捉えれば、奈良八島へ移転しており、より後水尾院との人間的関係をも歌中に投影できるものである。森蘊, 山村円照寺と修学院離宮, 大和文華, 第 6 号, 第 2 冊, 1952. pp. 11-23. 末永雅雄, 西堀一三, 文智女王, 円照寺, 1955 など参照。

註23) 玉潤、山市晴嵐「雨拖雲脚斂長沙 隠々残虹帶晚霞 最好市橋官柳外 酒旗揺曳客思家」底本前掲 16) , p. 196。

註24) 前掲 16) p. 98

註25) 伝玉潤、遠寺晚鐘「雲遮不見梵王宮 股々鐘声訴晚風 此去上方猶遠近 為言只在此山中」底本前掲 16) , pp. 198-199。

註26) 芳賀徹, 風景の比較文化史 —「瀟湘八景」と「近江八景」, 比較文学研究, 第 5 0 号, 東大比較文学会, 1986. 11, pp. 1-27

註27) 前掲 16) p. 99

註28) 前掲 5) , 寛文 1 年 8 月 1 5 日の条。

註29) 森蘊は万治 2 年 4 月をもって完成としているが、他にも諸説有り概ね万治 3 年以降をもって離宮の完成としている。前掲 4) , 修学院離宮の復元的研究、重森前掲 2) 、前掲 6) 、日向進, 桂離宮・修学院離宮, 御所と別業 一雅びの系譜, 講談社, 1984、久恒秀治, 京都名園記 中巻, 誠文堂新光社, 1968 など。また拙稿, 靈元院の修学院離宮御幸と後水尾院追想の場所『靈元院法皇御幸宸記』の解説を通じて、日本建築学会計画系論文集, 第 611 号, 2007. 1, pp. 231-236, 注 2) にて完成時期を考察した。

註30) 宮元健次, 修学院離宮物語, 彰国社, 1994, pp. 74-81

註31) 前掲 8) p. 141

註32) 寛文 4 年 1 1 月 2 3 日。伊藤ていじ, 庭 一三つのかたち, 淡交社, 1984

註33) 先年八景詩を担当した五山長老のうち 4 名が当時既に遷化していた。前掲 32) , p. 391。

註34) 前掲 14) 。虎林は本文中修学院八景詩歌を評しており、それ以前に当詩歌に触れていたことがわかる。

註35) 例えば靈元院享保 8 年 9 月の御幸において、「隣雲夜雨」を御幸の状況に重ねている。後水尾院追想の事態として拙稿, 前掲 29) にて考察した。

註36) 前掲 32) , p. 392。及び同, 解説, 宮廷の庭Ⅲ 修学院離宮, 淡交新社, 1968, p. 189 にもほぼ同文が収められている。

註37) 体系的に詠まれたものとしては前掲 9) 、前掲 14) の他、高泉禪師, 法苑略集四ノ五, 伏見仏国寺, 前掲 3) 重森所収など。

註38) 虎林前掲 14) 。十境詩中本文にて紹介されていないものを示す。蔵六庵「浮世富貴は電光遅し、何ぞ若かむ霊龜蔵六の時、織塵立たず無相の境、森羅の影に碧瑠璃を現ず」窮遠亭「一条の線路は天圻を歩む、門は辟羅に鎖されて世紛を離る、窮め得たり岑崆幽邃の処、杖頭は撐破す笠檐の雲」隣雲亭「天開図画は皇園に入る、翼爾たる高亭に彩鳳驚ぶ、誰是れ隣をトす宜しく地に接するは、蓬萊の五色鶴は乾坤」洗詩台「仮饒徐ろに凝れば須く詩を洗ふ、飛泉雪白く天涯に落つ、台峰は四万八千丈、瀑布廬に於いては亦す糸たり」菩提樹「聖主手づから菩提子を栽う、天を拄き地を撐へ緑崢嶸、見来れば樹に非ず又果に非ず、長に心在りて王宮裡に栄ゆ」止々斎「山阿縵遶す水曲の涯、玉虹瀾に臥して雲階を上る、無辺の煙は景化して工妙なり、相對して言を忘る止々斎」。以上小島憲之訓読の田中日佐夫他, 修学院離宮, 新潮社, 1984 所収を参考。

註39) 外山前掲 9) , pp. 374-377

註40) 「内詔與同志數輩獲遊」前掲 14) 。

註41) 拙稿, 前掲 1) 。

註42) 文政 5 年 5 月 1 7 日「御養生ノ為、年中両三度、修学院ニ御幸アラセラルベキニ依リ、御茶屋、御庭園ニ修理ヲ加フベキ旨、治定ス」より、同 6 年 9 月 2 3 日「修学院御茶屋御幸ノ費用ニ就キ、御附衆ヨリ両役ニ申達ノ事アリ」を経て、同 7 年 4 月 1 8 日「修学院離宮御茶屋礎理立柱ヲ行ハル」、同年 7 月 2 7 日「修学院離宮御茶屋の上棟ヲ行ハル」にて再建された。藤井譲治他監修, 光格天皇実録 第 4 巻, ゆまに書房, 2006。

註43) 再建の詳細については前掲 4) , 修学院離宮の復元的研究, pp. 35-36。

註44) 「壁はやや薄い紅色 (秋になると紅葉する庭前の楓樹に調和させてあ

る)。タウト、篠田英雄訳、修学院離宮一、タウト全集 第1巻 桂離宮、育生社弘道閣、1942。

註45) 拙稿、前掲1)

註46) 「月世界に住むという美人の名。もと、羿の妻で。羿が西王母からもらった不死の薬を盗んで飲み、仙人となって月にのぼり、月の精となったという。(中略)月の別名」諸橋轍次他、広漢和辞典、大修館書店、1981。

註47) 本詩中「両八」を良臣と訳した。「両八」を「二八」とし「十六人の良臣。八元・八愷をいう」の意を採った。「両八」を「八八」として「老成者・父」の意、すなわち上皇の表現とも解せたが、「二八」の場合、第一句から第三句までのつづきを仙人、殿上人、良民という階層関係のもとに読み下せ、本稿では「二八」を採った。前掲46) 参照。

註48) 「月にあるという宮殿の名」前掲46)。

註49) 「天和年間の図には早くも姿を消している」前掲3)、p. 81。靈元院御幸、光格院御幸ともにその名は現れない。

註50) 前掲4)、修学院離宮の復元的研究、pp. 43-45

註51) 前掲5) 万治2年4月14日の条。

註52) 「(前略)二川溶溶、流入宮牆。五歩一樓、十歩一閣。廊腰縵廻、簷牙高啄。各抱地勢、鉤心鬬角。盤盤焉、困困焉(後略)」(二つの川は、豊かに水をたたえつつ、宮殿の牆壁のもとに流れこむ。五歩進むごとに一つの高樓、十歩進むごとに一つの高閣がそびえ立つ。建物の間をつなぐ渡り廊下は、ゆるやかにカーブを描き、鋭く突き出た簷先は反りかえって、鳥が頭をもたげて餌を啄むかのよう。楼閣はそれぞれ異なる地形に随って巧みに造られ、宮殿の心臓部と緊密につながりつつ、簷先は互いに角を闘わせるように競いあう。ぐるぐるとめぐり、くねくねと折れまがる)。ここでは川の流れに沿いつつ、「樓」と「閣」とが緊密に関係しながら構成される様子を見ることができる。松浦友久他編訳、杜牧詩選、岩波書店、2004。

註53) 常子内親王、无上法院殿御日記、寛文12年3月10日、同13年2月16日、延宝3年3月1日など。藤井謙治他監修、後水尾天皇実録 第2巻、ゆまに書房、2005。

註54) 田中前掲38) p. 96

註55) 光格院御幸時になると「上御茶屋」に対してはじめて「下御茶屋」なる呼称があらわれる。修学院御幸録、前掲42)、実久卿記、同前等。靈元院御幸時においては「山荘にいたりて例のことゝまつ上なる隣雲にゆく」靈元院、前掲20)、享保12年10月2日の条、といわれ、また「山のうへなる窮邃」同前、享保13年2月11日、「山のうへなる滝」同前等ともいわれたが、呼称として「上御茶屋」「下御茶屋」などの呼称はみられない。

註56) 吉村貞司、修学院離宮、小学館、1976、pp. 173-175

註57) 前掲53)、寛文11年3月2日の条、同年5月6日の条、同12年3月10日の条、同13年2月16日の条、延宝5年2月17日等。一方『隔蓂記』中においては「上之御殿」並びに「下之御殿」という呼称がみられるが、本稿ではそれらを現在における「上離宮」並びに「下離宮」といった領域の呼称としてよりは建築物の呼称として捉える。むしろそこに示される「上之」場所並びに「下之」の場所こそが領域を示すものであり、また同記事中で「上之御殿」が「御池之御殿」とも言い換えられていることから、「御池」を現在でいうところの上離宮の領域を示すものとして考える。前掲5)、寛文2年3月28日の条。

註58) 拙稿、前掲1)

註59) 「(前略)蘇氏與客泛舟遊於赤壁之下、清風徐來、水波不興、舉酒屬客、誦明月之詩、歌窈窕之章(中略)客喜而笑、洗盞更酌(後略)」(蘇氏は友人と舟を泛べて、赤壁に遊んだ。清風がしずかに川面をわたり、長江は波立つことなく流れてゆく。酒を手にとって友人に注ぎつつ、明月を待つ詩を口ずさみ、美しいつれあいを求める歌をうたう。(中略)友人はよろこび笑って、さかづきを洗って飲みおした)。詩中「一葉の扁舟に駕し、匏樽を挙げて以て相属し、蜉蝣を天地に寄す、渺たる滄海の一粟なるをや」と

いわれ、その舟中における酒宴の意味が暗に示される。小川環樹他、蘇東坡詩選、岩波書店、1975。

註60) 前掲32)、p. 412

註61) 辻邦生、「後水尾」の美、芸術新潮、新潮社、1975。1、p. 36、北小路功光、修学院と桂離宮、平凡社、1973、pp. 138、前掲32) などがある。

註62) 筒井佐和子、「道」としての連歌 一心敬の連歌論、美学藝術学研究室紀要 研究 9、東京大学美学藝術学研究室、1990、pp. 112-131

註63) 前掲38) 詩文参照。

註64) 特に止々斎の位置する池畔での遊興は王維「輞川集」所収の「臨湖亭」を想起させる。池水に抛って俗世と隔絶された境地は熊倉の「結界」としての浴竜池解釈に通じる。前掲6)。

註65) 上御茶屋地曳御規式場所絵図、及び下御茶屋地曳御規式場所絵図、ともに宮内庁書陵部蔵。

註66) 地鎮祭と地曳祭を別に行う近世でさえ、「地鎮祭、俗云地曳」もしくは「地鎮祭又地曳祭とも云ふ」などというように地曳祭を言い換えて地鎮祭と称する場合もみられ、また神道の宗派によっては両者を未だ一体とするものもあった。特に修学院離宮における地曳祭の場合では、本来建設予定地を囲うべき細縄を張っておらず、『匠家故実録』に示される範型にはあてはまらない。離宮の場合が絵図の表題どおり地曳の規式を行ったものであるか、地鎮祭をも含んだ規式であったかはより詳細な論考を要するであろう。しかしながら当祭儀が上離宮と下離宮を別個の場所として認識した事実は変わらないと考える。安江和宣、地鎮祭と地曳、神道史研究、第21巻、第5号、1973、9。及び、村田あが、『匠家故実録』に見る建築儀礼、跡見学園女子大学短期大学部紀要、第36集、跡見学園女子大学短期大学部、1999。

註67) 荒木陸彦、地鎮・後鎮・安鎮 一 地鎮祭のフォークロア、建築雑誌、日本建築学会、vol.108、No. 1347、1993、9、pp. 50-51

註68) 前掲53)、寛文11年3月2日の条など、前掲57)。

註69) 前掲53)、寛文11年3月2日の条、同年5月6日、同12年3月10日、同年8月24日、延宝2年10月22日、同4年9月21日など。

註70) 拙稿、前掲1)

註71) 前掲53)、寛文7年閏2月6日の条。

註72) 谷采茶、修学院御幸、津本信博、江戸後期紀行文学全集 第1巻、新典社、2007、pp. 497-500 所収

註73) 拙稿、修学院離宮における「離宮」の場所についての一考察『靈元院法皇御幸宸記』の解説を通じて、日本建築学会計画系論文集、第601号、2006、3、pp. 217-224

註74) 「現われている側面は事物の側面として現われているかぎりでは、或る側面において他の側面があるはずとする指示関係のうちにある。すなわち、この或る側面は地平 Horizont であるが、この地平意識は回り込めば他の側面は見うという「私はできる」の信憑の上にある。そして、この地平は領野のそこを占めているのであるから、いわゆる地 Hintergrund の上の図 Vorgrund としてある」無限の野山はその都度の風景を露にする可能性を有するかぎり、対象の背後に潜む「地平」として捉えることができるであろう。玉腰芳夫、古代日本のすまい、ナカニシヤ出版、1980、p. 32。

註75) 村田正定、修学院御幸記、国立公文書館蔵、文政12年2月

註76) 円照寺が修学院から山端、さらには奈良八島へと移転した経緯については、森、前掲22)、及び末永他同22)を参照。

註77) 「愛宕郡村志に據れば赤山禪院より西方高野に踰る小坂の南にて舊時尚礎石を在し舊雲母寺の本尊不動尊は修學院の舊物なりしといふと。杉浦三郎兵衛、洛北修學院村道しるべ、雲泉荘、1927。

註78) 第2章第3節でいわれた「茅檐秋月」における「茅檐」を寿月観と解することもできようが、後にみる図版中央部の浴竜池の解釈には抵触しない。

註79) 拙稿、前掲1)、表1、表2、及び表3を参照。後水尾院、靈元院、光格院とわず赤山禪院へは参拝、赤山には茸狩りなどを目的に訪れている。

(2007年11月10日原稿受理、2008年3月11日採用決定)